

日本の鳥、数えています。

かぞ



●ヒヨドリ（ヒヨドリ科）
全長17cm。頭に小さな冠羽。上面から胸は褐色で、
黒褐色の縦線がある。下面は淡い。
地上では足を交互に出して歩く。
翼をはたかせながら空中でとまることができる。
さえずりはピーチキ、ピーチキチキ、チーチー、ビルビル、ビルルルなど
複雑な長い声。全国各地の田、河原、草場などにすむ。
農水、茨城の県鳥。

定点調査が意味するもの

定点調査。耳新しい言葉かも知れませんが、鳥類のすみ状況や環境をつかむために、場所をきめて、そこで見た鳥の種類と個体数を記録するものです。

年に夏3回、冬3回、一般の山野の場合、左右25mずつ、長さ3kmの調査線の範囲で見られた鳥類を記録します。ほかに水鳥の調査地も。この調査地は無作為で、鳥が多い場所を選んだりしていませんから、集計すれば日本全体の平均的な数字が得られるということができます。すでに昭和42年から実施しており、現在では全国で100点の調査が、環境庁から日本鳥類保護連盟への委託事業として、全国の鳥学者や愛好家の方々の熱心な協力によって行われています。いつ、どんな環境にどんな鳥類が多いか少ないか、など、鳥についての調査が、さらには日本の自然環境を知るうえに役立っています。

集計の結果が教えてくれるもの

この調査ではその種類の鳥を見つけた地点数を、全地点数との百分比で表わしたものを「出現率」としましたが、昭和42～50年の平均で、夏の出現率の高い種類を見ると、ホオジロ、ヒヨドリ、カラス、ウグイス、キジバト、スズメ、シジュウカラ、カワラヒワ、ツバメの順になり、冬ではヒヨドリ、ホオジロ、カラス、シジュウカラ、ツグミ、キジバト、カケス、モズ、スズメの順となります。出現率の高いものは日本中に分布し、しかも日本の平均的な環境に分布していることを示しています。そして夏にはホオジロやヒヨドリ、キジバトなど、耕地や人家のある場所でもすめる鳥が年ごとに出現率を高める傾向にあり、キビタキやサンコウチョウなど、森林性のものが減る傾向にあります。冬のツグミやシロハラがやや増える傾向のかわり、タカの仲間のノスリはかなり減ってきています。この結果を見ても、日本の自然環境がかなり単純化し、貧困化してきていることがわかります。



財団法人日本鳥類保護連盟
サントリー株式会社
この広告は財団法人日本鳥類保護連盟の指導を得て、サントリー株式会社から制作されています。

また、その地点で数えた鳥の数から、どの種類が多いかを示す「優占度」では、全国の、全年を通じての平均優占度上位の種類は、スズメ、ホオジロ、ヒヨドリ、ムクドリ、ツバメといったところで、出現率の高いものがここでも上位を占めています。こうした種類数・出現率・優占度を組合せてみると、調査地の自然環境の状況がおおよそ浮かんできます。たとえば自然環境の良好な場所の代表に「林」をあげると、鳥の種類は林の比率が高くなるほど多く、林の比率が低くなると鳥の個体数が多くなります。つまり、単純な環境にはある種類の鳥だけのさばっているわけです。山野の鳥の種類、数、それに生活区域を豊かにするには、まず「林」を増やすべきで、これは、ヒトの住む環境につながるテーマだといえるでしょう。

●愛鳥キャンペーン新聞広告掲載版
いままでのシリーズ広告をまとめたもので、教材や副読本として好評をいただいています。
①第1集(昭和48年5月～51年4月)…500円・千300円
②第2集(昭和51年5月～53年4月)…500円・千200円
1,2集まとめてご注文の場合1,000円・千300円
いずれも代金は切事でお申し込みください。
〒103-91 東京都日本橋区私書箱231号
サントリー株式会社 愛鳥キャンペーン係

トリからのメッセージ 69